

平成20年度 厚生労働科学研究事業

臨床研究・予防・治療 技術開発研究

科学に基づいた医療を提供するために



社団法人 日本医師会 治療促進センター

Research 11

研究期間 平成20～22年度

主観的個別化患者情報のデータマイニングによる
漢方・鍼灸の新規エビデンス創出

研究者

慶應義塾大学 医学部 准教授 渡辺 賢治

背景と目的

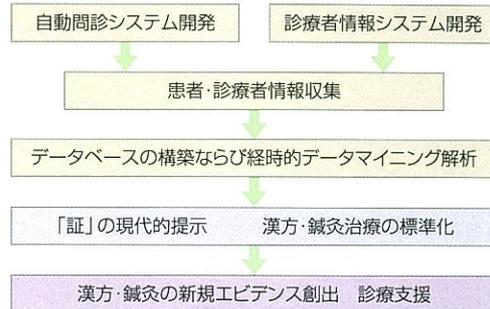
漢方医学では、個々の患者の状態に応じた治療を行うため、病名が同じでも異なった漢方薬が投与されることがある。病名が同じなら患者を同様と捉える西洋医学とは全く異なった体系をもつ漢方医学の有効性を確立するために、通常のエビデンス創出方法を用いることは妥当ではない。また、漢方においては、様々な検査所見以外に、自覚症状の改善を重要視している。このような漢方の特殊性を考慮して、本研究は、患者側からの主観的医療情報をベースにしたデータマイニングにより、治療効果の判定、および漢方・鍼灸の診断「証」と症状との関連性を解析し、漢方・鍼灸治療の新たな臨床研究の手法を創出することを目的とした。漢方・鍼灸は、患者の主観を元に治療を構築するため、エビデンス創出には患者の主観的評価を取り入れるという発想の転換が必要である。本研究は漢方・鍼灸医学のエビデンスを、従来の手法とは全く異なる伝統医療の特質を生かした手法にて評価するものである。

これまでの成果

患者の愁訴の変化を自動問診システムにより診療毎に集積する。このシステムには、128項目から成る質問内容が含まれており、包括的に患者の身体および精神状態が評価される。また、患者愁訴の変化はVisual analogue scale (VAS) スケールにて数値化される。これに加えて、医療提供者側からは診察所見、処方、鍼灸治療の手技、経穴等の情報を入力し、同じく診療毎に蓄積される。本システムによって、患者の視点から評価された症状の変化が、治療経過と共に時系列で記録されることになる。これまで、本システムの改良とともに、様々な症状・病名と他の症状・所見との関連性について評価してきた。西洋病名では、アトピー性皮膚炎と診断されても、漢方病態は様々に分類されること、冷え症という病態に付随する症状・所見として、月経異常、胃腸症状等いくつかのパターンに分類されることなど

が判明してきている。

研究体制

漢方病名&西洋病名において「アトピー性皮膚炎」を
結論とするルールのクラスタ分析西洋病名において冷え症を含む
高頻度病名サブセットのクラスタリング

- ルールではなく、西洋病名データに含まれる冷え症を含む高頻度西洋病名のサブセットをEclatアルゴリズムにより抽出
- 冷え症を含むサブセットでsupport > 0.005のものは22個

